

ケ―と対する答からも、子供の問食に対して栄養的な考慮があまり払われていない。(2)一方、子どもの一日栄養摂取量中によって占められる割合が重要な栄養素においてかなりの高い価を示している。(3)与えられたお八つで子どもが量的にも質的にも満足してはいない場合が多いということなどである。

幼児教育誌を通じてみた

初期保育界の動向

尚絅女学院短期大学 本田 和子

我が国の幼稚園界も八十年の歩みを重ね、その歴史の顧られる段階にきているが、私はここに「幼児教育誌」を通じて初期保育界の動きを知ることを試みた。

対象としてとり上げたのは「婦人と子ども」誌である。本誌は明治三四年の創刊以来「幼児の教育」と名称を改めた今日まで、半世紀の余もわが国保育界と歩みを共にしているし、さらに、初期保育界の動きを継続的にうかがうことのできる唯一の資料であると思う。

まず、「婦人と子ども」なる名称をもった大正八年までを一つの単位と考え、この期間に誌上に現れた諸記事を通して当時の保育界の動向を次の三点からとらえてみた。すなわち「幼児教育の中心的関心は何に向けられていたか」「幼児教育を指導した理論はどのよう

なものであったか」「当時の社会は幼児教育をいかにみていたか」の三点である。

ここでは、第一の「幼児教育の中心的関心事」についてのみ発表する。

中心的関心事を知るために、私はまず誌上に現れた様々な記事を分類しその頻度を調べた。もつとも頻繁に誌面に現れている記事は、それだけ当時の幼児教育関係者の関心を集めていたものとみてよいと思われるからである。

その結果、最も多く誌上に現れる項目は「子どもの遊戯」を扱ったものであることに気づかされた。明治三四年から大正八年までの一八巻中は遊戯を扱った記事は五〇例にわたっている。それゆえに、当時の幼児教育界の関心は子どもの遊戯に向けられていたとみなし、誌上に現れた遊戯論を考察した。

幼児の遊戯活動を保育の真髄とする考え方に格別の不思議はないが、当時の保育界においては、遊戯という語が異なる二種類の内容をもたされていたものようである。すなわち、いわゆる「唱歌」「手技」などと並び称される保育項目の一つとして狭義に用いられている場合と、子どもの営む自由遊びをも含めてより広い意味に用いられている場合とである。ここでこのように二種の遊戯観の存在した理由を考えてみたいと思う。

遊戯のある特定の型をもった活動として狭く考えねばならなかった背後には、フレイベルの恩物による保育とか、母の歌と愛撫の歌によるゆうぎといった一定の枠をもった活動を保育の至上の形態とする誤って解釈されたフレイベル理論が影響してはいしなかったであろうか。当時の米国におけるフレイベル批判は、わが国の幼稚園界をも刺激し、東基吉氏らの理論的指導者によってそれが紹介され

てもいるが、わが国保育界における恩物批判は極めて不徹底・曖昧であつて、関係者の間に恩物批判がなされながら、その関係者自身の遊戯観・玩具観が恩物の枠から脱しきれず、その形骸を引きずっていた。

ところでこのように恩物法にとらえられた固い遊戯観の支配的であつた当時であつて、明治三六年七月号掲載の「幼児の汽車遊び」と題する記事は極めて注目に価する。それは幼稚園で実際に展開された自由遊びの報告であるが、その内容的な豊かさと流動的な発展ぶりは目を奪うものがある。恩物批判が徹底せず狭い遊戯観の支配していた当時において、このような実態が報告されていること極めて興味深く、次の事情を反影している。

すなわち問題は遊戯にのみ限られず、当時の保育界における理論と実際との関係全体を覆うものであるが、わが国の幼児教育理論は一部有識者の海外思想導入の一環としてとり入れられたが、それらの理論が根を下してそこに幼稚園教育の実際が展開されたのではなく、理論は理論として有識者を啓蒙し啓発するにとどまり、実際は極めてわが国流に実情に即して展開されていった。その実際は導入された理論と決して無関係ではなかつたが緊密に結びついてもいなかった。わが国の初期幼稚園は、フレイベルの恩物理論にしたがつて保育の営みを始めたとされてい、またそれは確かでもあるが、貧しい創設期の幼稚園は完全な恩物の揃いを持ち得ず、訓練された保育者の数も乏しかった。そのために、恩物理論によるとは云え、わが国の伝統的な遊具や遊び方が幼稚園に入り込み、子どもたちが比較的自由に活動する余地が残されていたのである。幼児の自由活動が、明確な認識のもとに許されていたとみるより、初期幼稚園界の貧しい実情から、対象の生きた活動に保育がひきずられていたのだ

あり、そしてその子どもの営む自由活動の内容的豊かさに、心ある保育者は注目させられその価値を徐々に認めはじめたといつたとみる方が至当であろう。

大正中期に至つて倉橋惣三氏の活躍が誌面に著しくなるにおよび、これら子どもの自発活動をこそ保育の中心とせよとする考え方が強力に展開され、それに伴つて狭義の遊戯観が徐々に姿を消しているのが認められる。

絵本に関する一考察

隆崇幼稚園 寺田 豊子

私どもの園では毎月いろいろな絵本を幼稚園から渡しているが、ここ数年希望するものが減少する傾向がみえてきた。また、とつてもこのも家庭であまり関心を示さないという声をきく。他の園でも折々同じような声を耳にするのである。一方、最近では市販の絵本も大分よくなり、それらの間で園児たちがどんな関心を示すか、絵本に対する幼児の興味の傾向を調べ、私ども保育者はいかなる態度をとるべきか、保育の一資料にしたかった。

調査対象幼児は、近隣の幼稚園七園に依頼、三十一年度園児について調査紙をくばり、母親に記入を求めた。

回答数二三一。内、年長男児八一名、年長女児八七名、年少男児